

厳しい残暑の初秋、日が高く昇る前の朝早くウォーキングに出た。和男はマイレージ歩数計を腰に提げている。高齢者の健康促進の一環として始まったこの制度は、1日平均8千歩が目標だ。

和男はウォーキングを終えると、近くのコンビニに寄って歩数計をチャージした。協賛店には歩数を記録送信する機器が置かれてある。

「あら、こんにちは」

「ああ、どうも。チャージですか？」

「ええ、今日は涼しくて大分歩いたわ。いつもどちら方面を歩いていますの？」

「特別決めていません。長く住んでいるのに、意外に道を知らないですよ」

この女性とはもう何度もお会いしている。M市が取り組んでいるマイレージウォークは、老人達の健康維持ばかりでなく、一人住まいの老人には中々嬉しい制度だと思っている。

和男も妻の芳江を亡くして5年になる。若年性アルツハイマーで2年近く介護をしたが、突然心筋梗塞で倒れ亡くなった。大変だった介護からは解放されたものの、一人になると、もっと早くから妻の介護をするべきだったと自分を責めて内に籠ってしまう。時々腺病的な考えに落ち込んで体調を崩すことがあった。そんな時に、和男の生活を心配した娘の麻美がマイレージウォークの申込案内を持って来た。麻美は鞆からパソコンを取り出すと半ば強引に参加申し込みに登録してしまった。

当初はしぶしぶ参加した和男であったが、歩数計が取り持つ縁で顔見知りが増えるし、すれ違う人との挨拶も自然にできるようになって自ら楽しむようになった。近頃では、地域活性を促す様々なカルチャー活動の誘いも受けるから、以前とは打って変わって忙しく日々を過ごしている。

家に戻って、コンビニで買った菓子パンを仏壇にお供えしそれを食べていると、麻美から電話があった。

「歩いてる？」

「ああ、もう歩いて来た」

「明日、暇してるでしょ。顔見に行くから」

「暇かどうか、勝手に決めるなよ・・・」

「何食べてんの？」

「パン」

「ちゃんと食べてんの？明日は、私がウマウマ作ってやるよ」

「・・・いつものメンバーで？」

「そう、マー君も一緒だよ」

マー君とは、その年1歳になったばかりの勝（まさる）と和男が名付けた初孫だ。亮という次男の子どもなのだが、姉の麻美は自分の子どものように育てている。

「亮も、今日中に仕事済まして来るってさ。じゃねー・・・」

麻美はいつもこうだ。言いたいことをサッサと言ってサッサと切り上げる。妻が亡くなってからは子供達の言いなりだ。子供達が孫を連れて訪ねてくれるのは嬉しいのだが、時々、複雑な気持ちにさせられて悩むこともある。

電話を切って振りかえったら『困ったわねー・・・』と言う声がした。妻の遺影もどこか困り顔に見える。和男は仏壇に手を合わせると、『芳江。相変わらずだな・・・』と、つぶやいて、お供えした妻の分のカレーパンも食べた。

和男には、女と男の二人の子供がいる。

長女の麻美は、小さい時から活発な子で運動でも勉強でも積極的に優秀だった。近所の柔道場に通うようになると、負けず嫌いの性格を存分に発揮して勝てるまで猛練習をするから、体重別になってからは負けた話を聞くことはなかった。麻美に比べて弟の亮はまるで正反対の男の子で、自ら進んでもすることも言うこともない。控えめでおとなしい性格だった。それを少し覇気のないことに心配する妻は、あれかこれかとうるさく誘導するけど、亮は中々答えようとしなない。しかし、どういうわけか姉の麻美が言うと、嬉しそうに頷いて金魚の糞のようについてまわった。亮は姉の麻美が大好きで、麻美は弟の面倒をよく見た。

少し変わった姉弟ではあるが、和男はどこにでもある平凡な家族だと思っていた。しかし、妻の思いは違って、子供達のそれぞれの性格に干渉することもあったし、何かと不満を持って、和男に愚痴をこぼした。

親は子供が成長している大事な時期に、本当の内面を見ることはできない。だから表面をながめるだけで見落としてしまう。子供達が思春期から大人へと成長する時、不意に変化が起こる。芽生えた自覚にもがき苦しむ時期がある。親はそれに気付こうとしない。だ

けど、後で知れば大きなショックを受けるのだ。

和男達夫婦もそうだった。

或る日、亮の口から麻美は『LGBT』だ。と、聞いた時はさすがに驚いた。まさか娘が同性愛者だとは夢にも思わなかった。ぼんやり見ていた自分に気付いて二重にショックを受けた。しかも弟の亮は、そのことを妻にも麻美にも秘密にしないとだめだと言った。亮の姉に対する優しさも、母親の心配性を気遣う優しさも、その時、本当によくわかった。成長していた息子を知らずにいたのが最大のショックだった。

和男はカレーパンを食べ終えて、又、仏壇に手を合わせた。

『そんな困った顔するなよ・・・俺だってそう思うよ。子供たちの進む道に、納得した訳でないけど信じてやるしかないだろう。俺たちの子供だもの・・・麻美は一人前のすし職人になって、生意気に独立するようなこと言ってるよ。亮は、業界ではちよつとしたデザイナーだ』

今の和男にはマイレージウォークやカルチャーの他に、もう一つ、妻の経験できなかった楽しみがあった。

『それにさあ・・・マー君はかわいいよー、見せてやりたかったなー・・・』

和男は、ふと思いついたように床下の納戸から古い鞆を出してきた。中に束ねてあるのはメキシコに単身赴任していた時、家族と交わした手紙だった。

和男は手紙の束を仏壇にお供えして、又、声に出さず語りかけた。

『芳江が見たいと言ってた手紙だ。とうとう見ないまま逝ってしまったね・・・遅くなつてごめん。今更だけど、亮との約束があったんだ・・・』

○

その時期、和男は日本にいなかった。長女の麻美は高校へ、亮は中学へと無事入学するのを見てメキシコへ単身赴任して行った。

当時、日本はバブル絶頂期で大手の会社は早々に海外進出して成果を上げていた。和男の会社も南米を中心に調査を開始していたが、海外進出に異を唱える重役もいて足踏みしていた。それでもメイン銀行の後押しからようやく南米に活路を開くことに決まって、生産管理部にいた和男は、工場立ち上げのためメキシコに赴任することになった。

最長2年という当初の約束は、急変するグローバルの波によって1年延長し、更に延長することになり結局都合5年近くいたことになる。

初年度の和男は、休日も無くただがむしゃらに仕事に励んだ。単身赴任の寂しさを感じる暇などなかったし、日本に残してきた家族のことも考える余裕はなかった。たまに妻から無事である国際電話をもらえば、安心して仕事に向かうことができた。

しかし、2年目を迎えると急に風向きが変わった。メキシコでの仕事も区切りがつかなくなつて、楽しみにしていた一時帰国も取り消しになった。

そんな時、妻から一通の手紙が届いた。

妻からの手紙一

—— 一時帰国が流れたこと残念です。その後日本でもバブル崩壊のニュースが流れるようになりました。仕事のことよくわかりませんが、メキシコでもその影響はあるのでし
ようね。

そんな折、心配掛けるのとは思いましたが、私一人で解決できないこともあつて手紙を書きます。

亮はこの間、ケンカして傷だらけで帰ってきました。どうしたのかと問いただしても、何も答えません。すぐ病院に連れて行くと腕を骨折していることが判りました。骨折はすぐに処置しましたから、完治に日数は掛からないということです。

困ったのは、その後です。

麻美は、亮からケンカ相手を聞き出したと思います。麻美は柔道の技で相手の腕を骨折させたと言いました。今、麻美の高校では大問題になっています。柔道クラブの退部ばかりか、学校退学にまで発展しそうです。

私は、怪我した相手の家に何度も謝りに行きました。でも、許してもらえません。麻美が一緒に来ないとダメだということです。麻美は聞く耳さえ持たず、退学でもかまわないと平気でいます。

亮は、亮で、私には何も話してくれません。

あなたから麻美に手紙を書いてください。亮にも手紙を書いてください。心からお願ひ
します。

芳江——

妻の困った顔が目飛び込んだ。それでなくても人一倍心配性なのだ。手紙を読み終えると、すぐに傷ついた亮の顔も浮かんだ。麻美の勝気な顔が浮かんだ。

和男は家族を守りたいのに守れない状況の中にいる。家族から離れている自分に、今更ながらに気付いてハツとなった。二人を黙って抱きしめてやりたいと思った。何が原因でケンカしたのもわからずに、手紙を書けと頼む妻を安心させたいと思った。

日本から遠く離れていても、家族の心から離れてはいけない。

和男は何をどう書いていいかわからないままに、それぞれの顔を思い浮かべながら手紙を書いた。

亮からの手紙一

——父さん、手紙ありがとう。腕はもう平気だ。

そんなに謝らなくてもいいよ。遠くにいるんだからしかたないさ。

僕は、緊張するとドモるんだ。直そうとすると余計ドモるんだ。

母さんは心配性だろ。いつでも何でも心配。話せば心配がふくれるからしない方がいい。心配しない話を見つけるのは難しいんだ。だから、母さんには心配しないで欲しいから、話さない。

僕は、心配しない母さんが好きなのさ。

母さんには内緒だよ。

姉さんはかわいそうだ。今度の柔道大会で優勝するの楽しみにしていたんだ。平気な顔してるけど僕は知ってる。

僕がだらしなから、僕のせいで退学になるかもしれない。

姉さんは昔からそうだ。いつも自分を捨てて僕を守ってくれる。

父さん、憶えてる？

川で遊んだ時、二人がおぼれたのを父さん達が助けてくれた。あれはね、僕が先におぼれたんだ。姉さんが気付いて、泳げもしないのにゆかた着たまま飛びこんできた。あの時、姉さんだけが叱られたけど、僕をかばって何も言わなかった。

僕は姉さんを尊敬してる。世界一の姉さんだ。だから、退学だけは心配さ。そうならないことを祈ってる。僕にはそれしかできないからね。

父さんも、僕のこと信じてくれてたんだね。うれしいよ。

日本に帰ったら、昔みたいに釣りに行こうよ。

それまで元気でいてね。

亮より――

麻美からの手紙一

――おとう、元気そうで良かった。

亮は何も悪くはない。素直で正直な昔のままだ。ちっとも変っちゃいないよ。変わったのは声変わりと、ズー体。急にヒヨロヒヨロ伸び出して、もうすぐ私を追い抜く勢いだ。

私、アイツ等に怪我をさせちゃったけど、白状したよ。元々彼等が悪いわけじゃなかった。担任の先生が亮のドモリを笑ったのが、いじめの始まりなんだ。

それがわかったから、母さんと一緒に謝りに行った。

だから安心して。

おとうは、亮の話しぶりを知っているよね。普段の話に問題ないのに、大勢の前で話すと緊張してドモリ出すのは今も変わらないらしい。むしろ以前よりひどいかもしれないよ。私達家族の前ではドモリが出ないから、治してやろうとも思わなかった。家族が気付かないから余計苦しんでいたかもね。

おとうが日本に帰ったら、みんなで治してあげようよ。

家族みんなの責任だよ。

私は退学になってもやりたいことあるから、本当に平気だよ。

実は、すし職人になりたいんだ。最上鮎の二郎さんは、おとうの釣り仲間でしょ。中学しか出てないって言ってたじゃない。学校行かなくなつて立派なすし職人にはなれるんだ。おとうが釣ってきた魚だつて、今度は私がさばくからね。

母さんには内緒にしてよ。

私のすることは何でも反対なんだ。強く言ったりしないけど、困った顔見りゃわかるさ。亮のことは心配しなくていいよ。私にまかせて。

じゃーね。――

芳江からの手紙二

――変わらないですか。そして手紙送ってくれたのね。ありがとう。

麻美は柔道部やめたけど、退学にはならないで済んだし、亮もギブス取れて元気でいま

す。これで一安心。

あなたから手紙もらったこと、二人とも喜んでいきます。亮もまた手紙書くと言っておりました。あれから急に大人びて、何か変な感じがします。

あなたはどんな手紙書いたのかしら、とても気になります。

麻美は近頃、台所に立って料理をしたり、包丁を研いだりします。この前は、二人でお寿司を作ってくれました。

麻美は本気で料理の勉強をしているみたいです。

甘かったかー。とか、酔が勝ち過ぎていないか。とか、にぎり具合はどうか。とか、いちいち味の感想を聞いてノートにメモしたりします。私が実験台になったみたいでしょう。嬉しかったけど。でも、あれ以来、ハラハラすることの方が多くて、困ることもありません。

また、お手紙書いてやってくださいね。

こちらには、帰れる予定はないのでしょうか。

とにかく、健康には気を付けてください。

芳江――

亮からの手紙五

――父さん一時帰国できるんだって、母さんから聞いたよ。今年の正月は全員そろおうね。楽しみなだー。

この前も書いたけど、僕は、すぐに3年生だよ。

父さんほどじゃないけど、身長は姉さんとほぼ同じくらいに伸びた。ヒゲも生え出して顔つきも変わったと思う。だから、父さんが迷うといけないと思って、姉さんとツーショットの写真同封しました。この手紙書く前日に、母さんにバカチョンで写してもらったから、できたてのホヤホヤさ。

姉さんは変な帽子かぶっているだろ。父さんに送る写真だと言ったら、あわててかぶったんだ。片面刈上げのドス効いた髪形だからまずいと思ったらしい。伸ばした方はハデに染めているからヤンキーの女親分さ。

母さんが『困るわー』って独り言するけど、その気持ちわかるな。

普通にしてりゃー美人なのにつて。僕もそう思う。

だから、きつとびっくりして父さん腰ぬかすかもね。バラしたって手遅れさ。父さん帰

るまで刈上げ頭じゃ、そう簡単に伸びるわけないよね。

姉さん少しやせたでしょ。柔道やめて今は応援団長なんだ。そして、学校一の人気者。子分みたいのがいつもゾロゾロついて歩いてる。僕もその一人だけだね。

でも、ヤンキーの女番長じゃないよ。成績もトップクラスだし、アルバイトも真面目にしてる。一体いつ勉強してるんだろね。

僕は姉さんみたいに自慢するものないけど、秋の卓球大会で3回戦までいったよ。指導の先生がいいんだ。英語の先生で僕の発音がいいとほめてくれるから英語も卓球も好きになった。

英語は父さんが教えてくれたよね。2年近くメキシコに居たら、ペラペラになるかなー。メキシコって英語だっけ。

父さん、どのくらい日本にいられるか返事書いてね。

亮より――

麻美からの手紙四

――亮への手紙見せてもらった。

2週間の滞在でも仕事が大半なんだね。お休みが少なくても毎日顔見れるから、まあ、いいか。みんな楽しみに待ってるよ。

おとう、ちゃんと食べてる？帰国したら、夜ご飯は私が作ってあげるね。ちゃんとした日本食だよ。自分で言うのも何だけど、かなり腕を上げたからきつと驚くよ。

おとうの休みにはみんなで最上鮎に行こう。私、アルバイトしてこの日を待っていたんだ。だから心配ご無用。私をご馳走するからさ。冬の魚は油がのってるから超美味しいぞ
1。

進学のこと心配してくれてありがとう。

おとうが、帰ってきたら話すよ。でも、私の中ではもう決まっているけどね。気を付けて帰って来て。

じゃーね。――

○

和男は約2年ぶりで日本に帰国した。

経験のない空白なのか、空港に降り立った時から見るもの全てが目新しく、まるで浦島太郎の心境になっていた。迎えに来た家族と再会した時も、写真で見えていたにも関わらず、子供達の容姿から、声から、改めて変わっていることに驚かされた。そして、何故か照れ臭かった。

妙な力が抜けたのは、我が家に着いて自分の椅子に座ってからだ。それで、ようやく元の自分に戻れた。

その夜は約束通り、麻美の手料理で家族だけの歓迎会になった。

イカの塩辛、ふるふき大根、キュウリの糠漬、タイの刺身、カレイの煮つけ。和男の好物ばかりの大ご馳走だ。

「父さん、どうしたの？ニヤニヤして」

「うん、何か変な気分・・・」

「おとう、亮、変わったでしょう？」

「ああ、麻美もね・・・でも変じゃないよ。モヒカン頭以外はね」

「ほらー、ハハハ」

「笑ったなー。わさび効かずぞー」

「困るわー」

「ほらー、ハハハ」

和男は、つまらぬ不安が解消しているのを感じていた。

「これで、冬眠からさめたみたいだ」

「おとうは、熊か」

「そうさ、腹へらした熊だ。さあー、喰うぞー・・・」

「どう？・・・」

「うん、うまい。煮つけも上出来だ・・・麻美、鮭ないの？」

「注文つけるかー」

「ハハハ、だって熊だも。父さん、調子出てきたね」

亮には元々隠れた優しさがある。でも、その繊細な心遣いを簡単には見せない。繊細な故に傷つくことも多かったのだろう。以前と違うように映るのは表面だけじゃない。麻美が言うように確かに変わった。きっと、芯から変わったからだと思った。

それに比べ麻美はちつとも変わらない。昔から大らかで無垢な思い遣りがある。弟に対しては特にそうだった。麻美はそれを隠そうとして悪ふざけを晒して見せるんだ。しばらく会わぬ間にずい分大胆になった。思い遣りに磨きが掛かっているのだろうか。女なのに変だけど、ますます男らしく大胆になっている。

妻がわからないと始終こぼすのは、麻美の男らしい思い遣りだ。潔癖でさっぱりし過ぎてわからないのだろう。

和男との空白はたった2年でも、子供達にとっては成長を促す大切な時期だ。想像つかないスピードで、脳細胞を刺激して変化しているんだろうと思う。妻はわからないと何度も言うが、まだまだ成長過程だもの仕方のないことだ。和男だってわからないことの方が多。ただ、わずかな手紙のやり取りでも、子供の手紙には隠した心が見えることもあった。

和男は親の真心を持って手紙を書いた。そばに居てやれないことを悔やんで書いた。子供達も父親との2年の空白は重いものに感じたようだ。亮も麻美も心を開くの躊躇しなかった。だからといって、心の全てが書かれているわけではないし、ほんの少しだけ隠しきれないものが見えたにすぎない。思春期には誰でも道に迷うものだ。大人が子供の琴線をつかんで親の好む世界に引き込んではいけない。ヨワヨワと泳ぐ金魚をすくってはだめだ。和男は道に迷う子供達に手を差し伸べはしなかった。代わりに信じていることだけを書いた。でも、足りなかったかもしれない。

妻は手紙を見たいと言った。子供達は母さんにはまだ内緒だと書いた。母親を思いやる心から内緒だと書いてくれた。だから、もう少しだけ妻には内緒にしておこう。

日曜日は小雪もチラつく空模様になった。亮と約束した海釣りも亮の方が先にあきらめて自分の部屋にこもってしまった。

妻に受験勉強かと聞いたら、

「後で、のぞいて見れば？」と、いつもの困り顔を作った。

麻美も朝早くから、和食レストランにアルバイトに行っていない。

「麻美は、いつも忙しいんだなあー。昔と変わらないね」

「そうですね。以前は柔道だけだったから、そうでもなかったわ。今は、何してるか、何考えてるか、私にはちつともわからない。わかっているのは、応援団、アルバイト、料理研究、奇抜なファッション、うーん、それと、何だろ・・・」

「ハハハ。それだけ、わかってるなら十分だよ」

「とんでもない。それに演劇、音楽、友達も子分も大勢いて、よくわからないんだから・・・困るわ」

「まあ、そう深く詮索することないよ」

「亮の部屋、のぞいて見れば・・・一日中部屋に閉じこもって折紙作りよ。何を言っても生返事だし、何も話してくれないんだから。部屋の中は折紙だらけで凄く散らかっているから、掃除もできやしないわ・・・あーあ、亮は織姫で、麻美は男。それも異常に過激な男よ。どうして？・・・そう思わない？困ったわー」

「君は考え過ぎだと思うな。自分じゃないんだから、思うようにはならないよ。僕は良く育つてると思う」

「それでいいの？」

「いいさ。そんなに頭悩ませていると早死にしちゃうよ・・・じゃあ、亮の部屋でもものぞいてくるかな」

妻が干渉し過ぎるのは自身の心配性を勝手に重くしている。亮が手紙に書いた意味がよくわかる。むしろ子供達の方がずっと大人かもしれない。

「亮、勉強か？」

「ん？勉強じゃないよ・・・これ、何だと思う？」

「折紙だろ。母さんが言ってた」

「基本は折紙だけど、違うね」

「じゃあ、何さ」

「立体クラフトだよ。パッケージデザインとも呼ぶかな？」

「・・・ヘー。細かいなー、これ、亮が作ったの？」

「父さん興味あるんだ」

「よくわからないと、まあ、そうなるかな・・・」

「今作ってるのは、これなんだ！」

「ハー、こりゃー凄い。どうやって作るのさ」

「紙を折るのは直線だろ、曲線には折れない。だから、直線だけで折って立体を作るんだ。一枚の紙でも、折の展開図次第で何万種類の立体ができる。ダンボールみたいに裁断する展開図もあるし、パーツごとに折ったものを多重にして造形する物もあるんだ・・・」

これは、僕の描いた展開図ノートだよ」

「へー、複雑過ぎて、どんな形だかわからないよ」

「でしょッ。展開図だけ見て完成形を想像できるまでが、二流。完成形を想像して展開図を描けるのが、超一流」

「亮は？」

「まだまだ二流かな」

「父さんには、これ見ても何も浮かばないよ。三流以下だな」

「ハハハ、誰だって初めはそうさ。ダンボールの展開図だって、頭の中だけで組み立てるの難しいよね？今、父さんが手にしているのはダンボールの30倍だよ」

「エッ、そんなに？」

「広げてみてもいいよ」

「どこから広げるんだ・・・アレッ？・・・どうなってんの？」

「ハハハ、そうだよねッ・・・作為があってそう作る・・・ホラッ、ここをこう押すと、簡単に外れるでしょッ。折の展開がただ多ければいいわけじゃないんだ。複雑なものをシンプルに折れたたんで、こう隠す。秘密の扉を開かれないようにするのが、超一流なのさ・・・ホラッ、できた」

「ふーん・・・けど、何の役に立つんだ？」

「クラフトデザインで一番有名なのは宇宙船のアンテナかな・・・スケールはまったく違うけど、コンビニおにぎりの包装なんかその応用さ。1、2、3と、手順よく包装を解けば、海苔はピタリ巻かれるよね・・・おにぎり包装が特許の塊だと知った時は、まあ、驚いたよ。それがクラフトデザインをやるきっかけになったかもね」

「おにぎりねえ？・・・そんなところに目が行くのかあ・・・亮は、発明家になるの？否、幾何学だから数学者かな？」

「ハハハ、どっちつかずだよ。ある人は数学と言うし、ある人は芸術や発明だと言うけど、まだわかつちやいない。そんな僕にはどっちでもいいんだ」

「亮は、自慢するものないって言ったけど、あるじゃないか。今、父さんは凄いと思っただ・・・母さんにも見せてあげな！」

「まだ、だめだ・・・」

「なんで、誤解してるぞ？」

「うん、知ってる。クラフトのコンテストに出したんだけど、落選した」

「コンテスト、あるんだ」

「入選したら話すつもりだった・・・父さん・・・」

「ん？どうした」

「メキシコ行って、もうすぐ2年経つよね。春に帰れそう？」

「そうだなー、今、会議中だから何とも言えないな。隠すつもりはないけど難しくなってる」

「会社、大変なんだ」

「雲行きでは、もう一年戻れないかもしれない。何かあるのか？」

「うん・・・じゃあ、話すけど、姉さんには言わない方がいいよ」

「・・・」

「母さん病気だと思う・・・」

亮の怪我が元で、麻美の退学は逃れたものの、その後の生活態度や行動は、妻の心配性の種になっていた。声を荒げて争うことはないが、妻と麻美の会話にも次第に聞くに耐えないものになっていると言うのだ。妻の独り言も多くなって、行動にも異変が見えるようになったと言った。

「気のせいだと思う？・・・父さんは手紙で、僕や姉さんを信じてると書いたよね？今の母さんには何を言ってもだめなんだ」

「・・・」

「昨日、母さんがビールもらって飲んだでしょ。以前はお祝いでもそんなことなかったよね？今は、隠れて飲んで・・・」

「母さんが？」

「うん、お酒臭い時もあるし、顔を赤くしてるのも見たさ。それだけじゃない。父さんが帰ったからきれいに掃除されているけど、本当は違う。母さんは掃除しない人になった。だから、代わりに僕が掃除してるんだ。食事も僕が作ってる」

「そんな・・・麻美は、なんて？・・・」

「何も言わない。知らないふりしてるかもね。いつも居ない。母さんと二人で顔を合わせる嫌なのさ・・・でも、姉さんに母さんのこと話しちゃだめだ。絶対だめだからね」

「・・・」

「話したら、姉さんがダメになる。姉さんには、母さんを治すことはできないよ。原因

は自分だと思いいんだら、家を飛び出すかもしれない・・・」

「・・・」

「父さん！・・・姉さんは、LGBTだ」

朝早く麻美はバイトに行った。早引けしてくると言って張り切って出掛けた。その日の夕方、皆で最上鮨に行く約束をしていたからだ。私達3人は、店先で麻美と待合わせをした。

最上鮨の二郎と和男とは、昔から気の置けない海釣り仲間だ。二郎は和男のことを『和さん』と呼ぶし、和男は年下の二郎のことを『ジロちゃん』と呼んで親しくしていた。麻美の約束とは別に、和男は帰国前から久ぶりで顔を出すのを楽しみにしていた。

しかし、思いもよらぬ亮の話に愕然としていた和男は、気持ちの整理がつかないまま、また浦島の自分に戻っていた。

「やあ、和さん。久しぶりだなあー、元気してた？」

「ああ、まーね」

「アラッ、どした？釣られた鯖みたいな顔してー」

「いや、どうもしないよ」

四人そろって予約されたカウンター席に座った。右に妻芳江、左に麻美、その二人の間に挟まると妙な気分になるのがわかった。

「麻美ちゃん。釣られた鯖顔って知ってる？」

「知らない。なに？」

「鯖の生きぐされって言うんだ。つまり、張りのない死に顔って奴さ。和さんに教わった」

「ハハハ」

「余計なことを・・・そっちこそどうなんだ？髭なんか生やしちやって、ジロちゃんには似合わないぞ」

「麻美ちゃんは、いいって言ったけどなー」

「ウソ言え」

「取りあえずビールね。それとコップ3つ」麻美が頼んだ。

「あいよー！和さん御一家にビール2本、コップ3個。それと、亮君にお茶一丁ねーッ」

麻美は、和男にビールを注ぐと、手を伸ばして妻にもなみなみと注いで、また自分のコ

ツプにも注いだ。亮はカウンター端にいて素知らぬ顔をしている。

和男が麻美の顔をのぞくようにしたら、麻美は、

「私のおごりなんだから、少し位いいでしょ」と言った。

「和さん。うらやましいねえ。いい娘さんだ。気風もいいし力持ちだし、なんてたって遅しいよ。最後に頭いいとくりゃー言うことないねえー」

「娘だよ。それ褒めてんのか？」

「褒めてんだよー。そりゃ普通にしたりや美人さ。でも、バイトしてもらったら20キロの米袋軽々持つもんな。そっちの方がありがたいよ。シャリ合わせなんか、うまいよー、なあ？」

「ハハハ」亮が腹抱えて笑った。麻美もにやけている。

「麻美、ここでもバイトか？」

「まーね」

「進学、どうすんだ？」

「そんなの、あとあと。旦那さん、トリ貝にぎって」

すっかり麻美にご馳走になって、店を後にした。すると、麻美が和男の袖を強く引いて、店に戻る方に歩き出した。

「なんだよ」

「亮、おとうに話があるから、先に母さんと帰って。すぐに戻るから・・・」

その後、麻美は和男と歩きながら進学しないと話した。ずっと前から料理人になるか、できればすし職人になりたいと思っていた。もう、修行先も決めているし、今からでもすぐに修行したいと言った。それには親の承諾がないとダメだから、これから一緒に頼んでほしいのだからと言う。

「ネッ、おとう、お願い・・・お願いします」

和男の頭の中は、『LGBT』が、うるさくつきまとっていた。麻美に反論するのが怖い。何かが壊れそうで怖かった。

「・・・麻美は有言実行だからな。後に引かないんだろ？」

「そうだけど気持ち良く行きたいも。おとうは、私のこと信じてくれるでしょッ」

麻美は、和男の顔をのぞき見るようにした。麻美の目を正面から見るのが怖い。和男は目をそらすようにして小さく言った。

「そうだな・・・かわいい娘だもの、信じるしかないよ」

「よかったー」

麻美は最上鮎の裏木戸を開けて、叫んだ。

「旦那さん。二郎さーん、来たよーッ」

「おう、和さん。やっぱり来たかーッ」

「なんだよ、示し合わせたなー」

「俺だって子供いるんだ。男親だからわかるのさ」

「女でも、すし職人になれるのか？」

「何言ってるの！機械がにぎる時代だよ。ちっともおかしくないし、女職人は、ひきてあまたさ」

「で、修行っていうけど、どうすんの？」

「まず、うちでバイトしてもらおう・・・高校卒業したら、兄貴が築地で茶屋をやってるから、一年位は仕入れの勉強したらいいと思う。その後は彼女次第だ。茶屋でまだ修行を続けたいならそのままやればいいし、寿司屋に行きたいなら、兄貴が一流どころを紹介してくれるよ・・・兄貴にも、もう会わしているんだ。麻美ちゃんのこと褒めてたから、兄貴も期待してるよ」

「やっぱり、示し合わせたんじゃないか」

「まあ、そう言うな。麻美ちゃんは特別だよ。気合が違うんだよ。俺だって麻美ちゃんが来たなら嬉しいよ。でも、うちじゃー、一流の修行は無理だ・・・麻美ちゃんには一流を指してほしいし、その素質は十分あると思ってる」

「お世辞言うなよ」

「お世辞じゃないよ。バイトに来てもらって、取り組む姿勢が違うと思った。夢を持ってるとわかったから、言うんだよ」

「そうか。僕はしばらく留守にしてたからな・・・あまり大きなことは言えないし、よくわからない・・・」

「それはしょうがないよ。親だから言い難いこともあるさ。子供の方からはもつと言い難かったかもしれないよ。心配するなって・・・麻美ちゃんは俺が太鼓判押すんだから大丈夫だよ」

「ジロちゃんが、そんなにまで言ってくれるなら安心だ。じゃー、よろしく頼むよ」

「ああ、まかせとけ！・・・良かったなー、麻美ちゃん」

「おとう、ありがとう」

勝気な麻美が涙ぐんだ。和男は、こんな娘を見たことがないと思った。心配性の妻に言えない辛さがそうさしたのだろうか。

また、亮の声が響いた。『姉さんは、家を飛び出す』

「和さん、もう少し飲んでいくか？」

「いや、やめとくよ・・麻美、帰ろう」

「うん」

裏通りの薄暗い道を二人は歩いた。シンと冷え込んだ夜更けだった。麻美は少しだけ後ろをついて歩いた。

「本当に、いいのか？」

「ん？・・なんで？」

「・・麻美・・母さんには、何も言わなくていいよ」

「・・・」

麻美が和男に寄り添って来て、黙ったまま腕につかまった。

娘の体温が次第に伝わって来ると見慣れた街並みなのに変に懐かしく感じた。和男は遠い記憶を思い起こしながら腕を組んで歩いている。寄り添って歩く娘も同じ想いかもしれないと思った。そして、娘が無性に愛しくてならなかった。

翌日、和男は会社を半休して、愚図る妻を病院へ連れて行った。

和男の一時帰国で許された時間では、それが精一杯で、やり残したものは子供達に托すしかなかった。後ろ髪を引かれる想いで、また飛行機に飛び乗った。

○

亮からの手紙六

——父さん、元気ですか。

父さんに言われなくても、ちゃんと勉強もしてるよ。母さんもクリニックに連れて行ってるから心配しないで。

クリニックの好江先生は、偶然同じ名前だから良く憶えてくれるし、明るいいし、母さん

も嫌がらないで行ってるよ。菓飲みだしてから掃除も少しはするようになったし、大分いいみたい。

姉さんは、バイト行く前に食事の支度を全部してくれる。最上の旦那さんからも、差し入れがあつて食事は豪華なんだ。

今、日本はバブル崩壊のニュースばかりだよ。

特にリストラは、どの会社でもあると話してるから、父さんの事情もしかたないさ。

僕は高専のデザイン科を受けようと思うんだ。僕のクラフトデザインを最初に認めてくれたのも姉さんだし、父さんも褒めてくれたよね。サラリーマン目指すよりこれからは技術だと姉さんも言つてた。

自分で見つけた道なら、その道を行かない奴はバカだ。とも言われた。姉さんらしいよね。だから勉強頑張っている。

新作のクラフト構成図、入れて置いたからやってみて。

亮より――

麻美からの手紙五

――おとう、元気してる。返事遅くなってごめん。

先月無事卒業しました。これまで、いろいろ、ありがとう。

今日、ようやく引越し終えて、この手紙を書いてます。

卒業式の前から築地で仕事を始めてるけど、電車を通うから正確には遅刻なの。築地で仕事は暗い内から始まるんだ。だから電車で通えないから、築地近くのこの住所に引越しました。

四畳半のアパートだけど、ひとり立ちして大人になった感じ。

今度から、手紙はこつちへ送ってね。

茶屋は、もの凄く活気があつて忙しいよ。

この前、マグロの解体を目の前で見た。包丁はまるで刀だね。茶屋は珍しい魚で溢れていて、名前を覚えるのも大変だ。

今、ターレー（電気で走るリヤカーみたいな車）の免許を取るため勉強してる。朝早いのもまだ慣れないけど、社長も先輩達も皆よくしてくれるから楽しいよ。

亮が専門校合格したの、もう知ってるよね。

亮は偉いよ。家の中もきれいにしてるし、何でもコツコツやるよね。クラフトデザイン

も上達してプロ並みだ。

あいつは優し過ぎて何も言わないけど、母さんのことは最初から知ってるよ。私も家を出たから、少しは落ち着くんじやないかな。でも、亮にばかり任せて申し訳ないとは思っている。

だから休みの日は、なるべく家に帰って食事作ろうと思う。魚の三枚おろしは毎日見るから、もう完璧だよ。

おとうも大変そうだけど、無理しないで頑張ってるね。

麻美。――

和男は、又長い単身赴任になっていた。会社は業績不振に陥り資金繰りにも四苦八苦しただ。メキシコの工場立ち上げも、宙ぶらりんになり中々方針が定まらないのだ。そんな中、家族との手紙の通信も、身を切られるような辛いものになって行つた。

妻からの手紙は、帰国しないことを恨むことばかりで、子供が駄々を捏ねるようなことまで書いてきた。とうとう終いには、返事も来なくなってしまった。

和男は妻の病気悪化を心配して、亮や麻美の様子を聞く手紙を出した。二人とも父親を気遣って安心する手紙ばかりくれたが、その端端には、次第に病気の悪化の様子が覗えるようになった。そして、ついに、心配していたことを知らせる手紙が届いた。

麻美からの手紙十二

――おとう、元気ですか。

おとうが一時帰国してから、もう3年になるよ。その間、一時帰国もできないなんておかしいよ。

会社は、おとうにだけ責任を負わしているんだ。

もう、私は我慢できない。

亮はおとうに心配掛けたくないから、辛抱強く隠しているけど、母さんはひどくなるばかりだ。私達がお酒を隠したり捨てたりしても、何所からか知らぬ間に買って来て飲んでいる。

クリニックの好江先生も、入院を勧めているよ。でも、私達が何を言ってもだめなんだ。入院の話なんて出そうものならヒステリックになるし、言っていることもメチャクチャでまったくわからない。特に、私にはそうだからよくわかる。

好江先生は躁鬱だけじゃないと言った。若年性アルツハイマーかもしれないし、アルコール依存症もあるから、紹介する専門病院にすぐ入院して、詳しく調べた方がいいと言った。

早く帰って来てよ。一時帰国でもいいから、母さんを入院させないとダメだよ。

オーバーかもしれないけど、母さんが危篤だから一時帰国させてくれと。とにかく会社に頼んで。お願いします。

麻美。――

亮からの手紙十五

――父さん、ごめんね。姉さんから手紙があったんだね。

父さんに隠してたこと謝るよ。

母さんは、姉さんにばかり辛く当たるんだ。

僕も、二人の言い争いを見るけど本当に嫌になる。いつか、姉さんは我慢できなくなると思ってた。それでも、僕は希望をもっていた。あきらめずに二人を信じていたよ。

姉さんは余程苦しんでいたんだね。

母さんは、今、正気じゃない。正気じゃないから、わかるわけがない。正気な人でもLGBTを理解できない人が多いんだ。

父さんは、覚悟を決めたの？

でも、父さんに会えるのだけは嬉しいよ。

迎えに行くから、気をつけて帰ってきて。

亮より。――

○

空港には、子供達が迎えに来ていた。そこに妻はいなかった。

「父さん、お帰り」

「亮、迷惑かけてるな」

「ううん、うまくやれないで、ごめん」

「謝るのは父さんの方だ。こっちこそ、ごめん。又背が伸びたなー……麻美、手紙ありがとう。今日、仕事休んだのか？」

「当然でしょ」

「母さんは？」

「連れてこなかったけど、首長くして家で待ってるよ」

「おとう、いつまでいれる？」

「入院させて落ち着くまで、ずーっと、居るさ」

「いいの？」

「ああ、危篤なんだから、いいに決まってるよ」

「危篤？」

「母さん、どんな具合？」

「うん、元気・父さんが帰るよって言ったら、急に元気になった。朝から掃除して洗濯して、化粧もしてた・何だか、昔に戻ったみたい」

「・・・」

「おとう、今日はご馳走だよ。社長に最上級のウニもらった。おとうの大好物だよね」
「ちゃんとやってるのか？相変わらず変な頭して、それで仕事していいのかよ」

「築地じゃ、誰も気にしないよ。逆に、似合うって言われて評判さ。なあー、亮」

「ハハハ、そうだね。姉さんは何所に行っても人気者だよ。父さん、築地って広いよー。
ターレーに乗ってる姉さんなんか、カッコいいんだから」

「じゃあー、父さんも見に行こうかな？本当かどうか、確かめに行くからな！」

「やだねー。でも、来てくれたら嬉しいな」

「父さん、急いで帰ろう。母さんじれて待ってるよ」

駅を降りると、秋の夕暮れが街を赤く染めていた。ユラユラゆれながら落ちる夕日は、メキシコのものど違って心も揺らす。たなびく雲にも優しさがあると思った。和男はタクシーに乗らずに、歩いて行こうと言った。

「秋の夕日は、つるべ落としか・・・」

「おとう、懐かしい？諏訪神社の方を歩いて行こうか・・・」

「夏のお祭り思い出すよね。今年もあったけど、出店も減ってさみしくなった」

「そうか？亮からそんな話を聞くと、不思議な感じがするな。それだけ時間が過ぎたというわけか・・・」

「おとう、早く帰れるといいね」

「そうだな。このまま居ついちゃうかな？」

「賛成」

「僕も賛成だよ」

「・・・」

家には灯りが点いていた。台所の窓に妻の影が動いているのが見える。ようやく帰って来たと思つた。

「ただいまー。父さん帰つたよー」

「あら、お帰りなさい。ずい分遅かったじゃない？私も迎えに行けばよかつたわ」

「ただいま。タクシー乗り場が混んでいたから、歩いて来た」

「あなた、先にお風呂に入つたら？お疲れでしょ？」

「そうか？・・・それじゃあ、先にいただこうかな」

和男は、妻が太つたことに一瞬驚いた。顔がむくんで見えるのは化粧のせいばかりでもないように見える。歩く姿も変わったように感じた。妻が病気だという先入観もあるが、妻の話しぶりにも、定まらなく動く瞳にも、何か違う空気が漂っている。

和男は風呂場に行った。洗面台に手入れしない毛のついた妻のブラシがあつた。着替える籠の中に、濡れたままの洗濯物があつた。

そして、妻が脱ぎ捨てた下着を見た時、これはただ事ではないと思つた。

「この肉ジャガ、母さんが作ったの？」

「そうよ、しらたきなかつたから、葛きり入れたわ」

「さすが母さんだ、機転がきいてるねー・・・」

「あなた、いつまで居られるの？」

「何もなければ、しばらく居るつもりだ」

「やったね、母さん・・・そうだ、父さん！しばらくいるんだつたら、まずは、二人で温泉でも行つたら？」

「そうだよ！秋の紅葉だし、おとう、それいいよー。亮、ナイスアイデア」

「温泉か、しばらく行ってないなー」

和男はそう言つて、妻に振り向いた。

「あなたが、いいなら・・・いいわ」

「あなたがいいなら、いいわ。だって。母さん照れてるよー」

「ほんとだー。おとう、どうする？」

「・・・いいのか？」

「いいに、決まってるじゃない。おとうも、照れてるなー」

亮も麻美も、無理にはしゃいでいるのが良くわかる。和男は、妻を気遣う子供達が嬉しかった。大人びた二人を頼もしく思った。でも、その無理な気遣いは、妻の病気の重さを余計に物語ってくる。

「遅いなー、6時まで届くはずなのにー」

「姉さん、母さんの肉ジャガを始めようよ。その内、荷物届くよ。ウニとマグロなんだから？届いたらすぐに食べれるじゃない」

「しようがない。そうするか」

ビールで乾杯するので、麻美は和男に注いで自分にも注いだ。亮も妻に注いでやった。そして、自分にも注いで言った。

「お祝いだからいいよね？・・・じゃー、父さん達の旅行に乾杯だ」

「カンパニー！」

「あぁー、おいしいわー」

「・・・」

妻は残さずビールを飲みきった。肉ジャガは煮詰まっていたひどく塩辛かった。葛きりも形を失くして底に沈んでいた。

「母さん、今日はお祝いだから、もう一杯、いいよ」

「そう？じゃー、遠慮なくいただくわ。お祝いだもの・・・今日の亮は優しいのね」

「・・・」

「みんな集まったから、見せたいものがあるんだ」

亮は、クラフトコンテストで入選したメダルを見せた。副賞の十万円を貰ったと言った。そして、白い封筒に入れたお金を妻と麻美に渡した。

「半分ずつだけ。母さんこれで旅行の服とか買ってよ。姉さんには、いつも小遣い貰ってるから少し返すね」

「亮、それは父さんが出すよ・・・」

妻が隣で無邪気にも、封を切ってお金を数えている。

「父さん、いいんだ・・・僕は春には卒業だろ。コンテストで特選は取れなかったけど、入選者の中では僕が一番若いんだ。それでデザイン会社からスカウトされたよ」

「亮、凄いじゃない」

「でも、就職はしないって断った」

「なんでー？」

「人混みの中、通勤するのも嫌だし、大勢の社員に混じって仕事するのも苦手だからね。それで、フリーでやれるならいいですと言ったら、承諾されたんだ。もう、仕事も貰っている。家でもできる仕事だから僕にはピッタリだよ」

「もっと、凄いじゃない」

「今日は、それも含めてお祝いなのさ。もう心配ないよね、父さん！」

今回、和男は覚悟持って帰ってきた。妻の看病のために会社を辞めようと悩んでいることも、亮には見えていたのかもしれない。

仕事の決まった話も、和男を安心させるためにしたのだろうと思った。しかしその後、『心配ない』と言ったのは、妻のそばに和男がいて欲しいと願ったものか。それとも、亮自身が家に居て、仕事も妻の面倒も、見えるから心配ないと言ったのか。そのどちらかは、わからなかった。

いずれにしても、和男は、亮に何もかも見透かされていることに驚くしかなかった。大人になったことを認めるしかなかった。

「母さんには、ずい分迷惑かけたね・・・」

「そうよ、私はいつも心配ばかり・・・休まるなんてないわ。だから、なーんにも手に付かなくなっちゃうの。何をしているのか、ボーっとしてわからなくなるの・・・」

妻はそう言って、いつの間にか自分で注いだビールを飲んだ。煮詰まって、しょっぱい肉ジャガを口に運んだ。

「・・・」

「アッ、そうだ。お土産忘れていたよ・・・あれッ、鞆どこ？」

「亮、鞆だつてエー」

その時、玄関のチャイムが鳴って、麻美の頼んだ発泡スチロール箱が届いた。ザラ氷の入った箱にはウニの木箱が3個にマグロの柵、生きの良さそうなヒラメと甘海老があった。麻美は嬉しそうに、ウニとマグロを手早く盛り付けて、

「おとう、ヒラメのさばくのを見てみる？」と言った。

「ん？・・・職人技というものを、おがめというのか？」

「やだなー、すぐちやかすんだから。ホラッ、ヒラメはこのサイズが一番美味しいんだ。」

エンガワなんか最高さ」

「へー、大したもんだ。その包丁いいね」

「わかる？自慢のマイ出刃だけど、風格出すにはまだまだこれからよ。これでヒラメは百匹以上さばいたかな？」

麻美の包丁さばきには確かに感心させられた。そして、肉ジャガの口直しにウニやヒラメは贅沢で美味しかったが、以前の妻が作る肉ジャガの味を思い出すと、悲しい気持ちになった。

「父さん、こっちの鞆でよかった？」 亮が鞆を提げてきた。

「そうそう、それだよ」

和男は、南米独特の赤系テキスタイルで鮮やかに染め込んだストールを二枚出して、妻と麻美に渡した。亮にはメキシコ幾何形体のデザイン画集を土産にした。

「すてきー、いい柄ねー。あなた、ありがとう」

「メキシコの赤系はポンチョで見ると、本当に鮮やかだよ。おとう、ありがとう」
すると、妻が麻美の方のストールを奪い取るように言った。

「麻美、ちよつとそれ見せてよ・・・あらー、これいいわー。麻美はストールなんか知らないでしょ。これッ、私に頂戴」

「しようがないなー。じゃあ、そっちでいいよ」

「だめよ、これは父さんから貰ったんだからー」

「・・・」

「芳江！それはないよ。どちらか一枚は麻美の土産なんだから」

「なによ、今頃、帰ってきてー。これまで、ほったらかしたのは誰よ！」

「・・・」

すると、亮が妻のそばに行つて、

「母さん、落ち着いて・・・父さん帰ったばかりだよ。父さんにそんなこと言っちゃ、いけないよ。落ち着いて、ネッ・・・」 背中を擦りながら言った。なだめるように静かに言った。

しかし、妻は治まる様子がなかった。

「麻美！あなたは帰りなさいよ。明日仕事でしょッ。もう遅いんだから、早く帰って・・・」

「わかったわ。母さんは私がいけない方がいいんですよ！」

和男は豹変した妻に驚いて返す言葉が出ない。この場を取り繕うこともできなかった。

何か言えば、事が大きくなると思つて佇んでいた。

麻美の勝気な顔がゆがんで見える。

「麻美・・・」

「おとう、いいんだ。いつもの事だから・・・私、帰るね」

「麻美・・・そこまで送ってくよ」

「うん・・・」

二人は人通りの少ない諏訪神社の道を歩いた。和男はまだ時間もあるし、話もしたい。食事も途中だったから最上鮎に行くかと誘つた。麻美も話たいことがあると言つた。しかし、最上鮎の二郎に話を聞かれるのは嫌だから、麻美は神社の広場にあるベンチがいいと言つた。神社に人影はなかった。麻美は街灯の当たらないベンチを選んで座つた。

「驚いた？・・・母さん、あれでも今日は落ち着いている方よ。私がいなければ、少しはマシなはずだから、おとうが帰る頃には変わつていると思う」

「確かに驚いた。あれほどとは思わなかつた・・・これで覚悟は決まつたよ」

「何が？」

「会社を辞める覚悟さ。母さんの介護をしようと思う。もう、お前たちには迷惑を掛けられないからな」

「えっ、このまま辞めちゃうの？」

「おそらく、そう簡単にはいかないだろう。引き継ぎないのも無責任だしね」

「じゃあ、いつ辞めるの？」

「一旦、メキシコに帰つて整理してからかな？」

「その後、仕事は？」

「しばらくは介護に専念するよ。折見て職探ささ。もう、定職にはつけないだろうけどね」

「家のローン、まだあるよ」

「麻美、そんなことまで気遣うようになったのか？・・・余計な心配しなくていいよ。貯金も少しはあるし、なんとかなるさ」

「・・・」

「心配するなつて・・・」

麻美はしばらく考えた後、急に振り向いて叫んだ。

「心配する！・・・母さんは・・・母さんは詐欺にあったんだ・・・もう家には、そんなお金なんか無い！」

麻美は、バックから一冊の銀行通帳とカードを取り出して渡すと、その他は通帳もカードも解約して無いと言ったまま、膝に顔を埋めてしまった。

渡された通帳は、暗い中でも普通預金だと確認できた。その通帳には幾らも入っていないのも知っていた。和男は突然の話に体中の血が引くのを感じて、すぐに、その訳を聞きたいと思った。そして、麻美の肩を揺すろうと手を掛けたら、暗闇の中で小さく震えているのがわかった。しばらくすると、麻美が相談したかったことはその事だと言ってポツポツと話した。

「母さんは、ネッ・・・近所の親しかった人達からも、知り合いからも、みんなに疎まれてしまったのよ・・・誰からも相手されないようになった。可哀そうだけど、仕方ないよね。病気だもの・・・話し相手いないのは寂しいでしょ。寂しいから、尚、あちこちに電話するよね。それが悪循環になって、ますます孤独になっていった・・・そんな時、詐欺師グループに騙されたんだ」

「・・・」

「・・・つい、親しく声掛けられて、優しくされれば嬉しいでしょ・・・詐欺師達には格好の獲物だよ。グルになって、次から次と騙し続けたんだ・・・亮が気付いた時には、もう遅かったよ。警察に届けたってだめさ。証拠も何にもなかった・・・母さんは、私よりも詐欺師達を信用していたんだ！・・・何もできなかった。過ぎてしまったことだから、手紙にも書けなかった」

「・・・」

和男は、息の詰まった麻美の涙声にジツと耳を傾けていた。そこには危惧した以上の現実があった。しかし、それは妻の責任ではない。まして子供達の責任であるわけなどない。そして、全ての責任は和男自身だと思った。

「もう一年半前のことよ。おとうが、母さんに話しても無駄だからね。警察に行ってもダメ！もう誰も相手してくれない・・・私達には、母さんを助けることはできなかったんだ」

和男は、『じゃー、今まで、お金は・・・』と、言い掛けてハツとなった。すると、体中の血が引き戻って来るのを感じた。体も心も温かくなっていくのを感じた。まったく、違う思いが浮かんできたのだ。

麻美の母親を思いやる心が見えてくる。決して見捨てることのない辛抱強い愛だ。

「何だ！この事か。この事だったのか」

亮が妻に『服を買え』と金を渡した。麻美が『心配する』と言って、亮に小遣いを渡した。そこには、母親に信用されなくても麻美らしい気遣いがあったのだ。

和男は、いつか嬉しくなっていた。可笑しくてたまらなくなった。体中の力が抜けて、全ての筋肉が緩んでしまった。

「麻美、泣かなくていいよ。過ぎたことだよな・・・」

「ん？おとう。何？・・・笑ってるの？」

「アハハ、スツカラカンで、なんだか気持ちいいのさ！」

「えっ！・・・変なの」

「そうだよ。変だよ・・・母さんと違ってドンカンで、父さんは変なのさ。アハハ」

「可らしい・・・」

和男は、涙を拭っている麻美の頭を小突いて言った。

「バカだもなー」

「バカだよー。気持ちいいって笑うおとうは、もっとバカだ・・・でも、そんな、おとうが世界で一番好きだ・・・ウフフ」

「明日、母さん連れてクリニックに行くよ。そして入院が決まったら、次は築地だ。麻美が、本当にちゃんとやってるかどうか、社長に聞かなくちゃなッ！」

「うれしい！それに・・・」

「それに？・・・」

「きつと、大丈夫だよな？」

「大丈夫に決まってるだろ・・・怒るぞ。もう心配するな！」

麻美は鼻水をすすって泣き笑いの顔を向けた。そして、二人で笑った。

和男が家に戻ると妻は先に休んだらしく、亮が一人で小包を作っていた。麻美が包丁を忘れたのを宅急便で送るのだと言った。

亮は、盛り替えた刺身とビールを冷蔵庫から出してきた。

「父さん、あまり食べなかつたでしょ？」

「そうだな。亮は？」

「うん、一緒に食べよ。久しぶりだもね」

「亮も大人になったなあー。サツ、少し飲めよ」

「いや、いいよ。お酒の味は苦いだけでわからないんだ。さつきは無理して飲んだ・・・」
和男は通帳を出して、麻美から話は聞いたし会社を辞めることも説明した。そして、その事でもう心配することはないと話した。それより和男は亮の仕事について、帰り道に考えたことがあった。

「亮がフリーで仕事をやると思ったけど、もう少し後でもいいと、父さんは思った・・・家で集中できるとしても、視野は広がらないよ。一歩間違うとオタクになるかもしれないし、若い内に籠ってしまふのは危険だ。今は、仕事もうまくいくかもしれないが、長く続くと思いきいんじやだめだと思う・・・亮は、時々、世間が怖いと思ったことないか？」

「うん、あるよ」

「それなら尚更だ。若い時は世間に揉まれた方がいい。デザイン会社に、まずは就職した方がいい。母さんのことは、もう、心配しなくていいよ。父さんは、もう十分に亮や麻美に感謝している。だから、父さんも何かで返さないとな・・・」

「父さん・・・」

「・・・亮が、姉さんにお金を返したように、ネッ！」

「ううん、ぜんぜん足りないよ。姉さんは、父さんに内緒だと言ったけど・・・」

亮は隠さず話すと言った。

麻美は妻にどんなにひどく言われようと我慢していたし、アルバイトで貯めた預金の全ても、就職してからの給料の一部も、黙って渡して支えてくれた。いつも心配する電話をくれた。そして、

「顔を合わせば今日みたいになるの知っていたし、詐欺にあった事にも責任を感じている。めったに顔を出さないけど、黙って蔭で見えてくれた。姉さんは、昔からそうなんだ」と、言った。

「お前たちは・・・」

和男は、それ以上言葉が出なかった。何気なく通帳を開いて見ると、毎月6万円ずつが定期のように記されている。十カ月以上あった。

和男は胸が熱くなった。

翌朝、妻は落ち着いていた。耳鳴りが酷いと言っただけで変な我を通すような様子もなく、和男とクリニックに行くにも愚図りはしなかった。ただ、妻が普通でないと思わせたのは、メキシコ土産のストールを二枚重ねにして執着を見せる姿だった。時々、無意味にストー

ルを掛け直すのにも、首を傾げざるを得なかった。

「寒いのか？」

「寒くない・・・」

「遠くないけど、歩ける？それとも、バスで行く？」

「歩くわ。いつも、バス代節約するの・・・」

「・・・」

街路樹の銀杏並木はすっかり落葉して、広がる青空にうろこ雲を浮かべている。歩道の脇を車が通るたび、銀杏の落ち葉が飛ばされて寄ってくる。妻は黄色く寄り集まった落ち葉の上を、わざと面白そうに踏んで歩いた。

「銀杏の葉っぱは、滑るから危ないよ」

「滑ってもいいわ」

「なんで？」

「あなたが、居るから・・・」

「もう、ずっと居るよ。どこにも行かない」

「よかった！ウソでもいいわ」

妻が笑った。久しく見なかった笑顔だ。和男は嬉しかった。

又ストールを掛け直して、それを自慢するように笑って見せた。しかし、無邪気なその笑顔はなぜか嬉しくなかった。

クリニックでは専門病院への紹介状を書いてもらい、即時入院の説明も聞いた。そのことは予め麻美からの手紙にあったから、特別に驚くこともなかった。

それに加えて先生が言われたことは、若年性アルツハイマーは、進行が早いから処置も急い方がいいということ。発作的なことが頻繁に起こると急激に進行するということだった。そして、病気の進行は薬や環境で押えるが、完治した例はないと、最後に告げられた。——和男はショックを隠し切れないまま、せめて入院前に気晴らしの旅行はどうかと尋ねたが、残念だけど急に居場所を変えたり、移動しながら景色を眺める旅行は、この病気には刺激になって良くないのだと説明された。とにかく早く専門の検査を受けて、治療すべきだと言われた——

待合室の隅に赤い絨毯を敷いた子供の遊ぶスペースがあった。

妻は、そこにちよこんと座って、子供が積み木で遊ぶのを嬉しげに見ていた。崩れて転

がってきた積木を子供に渡して笑っている。ストールを見せて何か子供と話している。

和男は、最後に告げられた言葉に心を砕かれていた。すぐに声を掛けられなかった。妻が気付くまで声を掛けないで見ていた。

クリニックを出たら、うろこ雲は風に飛ばされてすじ雲に変わっていた。冷たく吹く風は、和男の胸に染みわたった。

「なあ、芳江・・・」

「なあーに？」

「今朝、耳鳴りがすると言ったよね。亮から聞いたけど、頭痛も酷いんだって？」

「・・・」

「ボーツと、するって言ってたじゃない？」

「そうよ。時々、何してるのか、何言っているのか、わからなくなるの」

「そうか。先生はなあー・・・」

「先生は、なんて？」

「うん・・・俺がそばにいないと、ダメだと言った」

「そう。そう言ったんだ。そうだよね・・・」

「早く入院して、治療をすれば治ると言ったよ」

「入院？」

「ああ、俺がそばに居て、看病しないとダメだと言った」

「・・・」

「入院は、いやか？・・・俺が毎日介護するよ？」

「本当に？」

「そうさ、もうメキシコには帰らない。今、決めた。ウソじゃないよ！」

“若年性アルツハイマーは、完治はしない”

本当にそうなのか。そうでないことを祈っても、和男の覚悟は決まった。会社から無責任だと言われようと、メキシコに帰って引き継ぎする時間などない。病気の進行は一刻を争うのだ。妻を見守るに替えるものはない。その事以外に、子供達にも返すものはないのだと思った。

二人は帰りも歩いた。時おり吹く風に落ち葉が飛んでいる。

バス通りに出る角に小さな公園があった。来る時は気付かなかったけど、奥に銀杏の大

木が2本並んで立っていた。厚く積もった落ち葉が黄色に染まっている。妻は黄色がきれいだと言って、公園に入って行った。

妻は、落ち葉のたまりに足を入れて蹴り上げた。銀杏の葉は花びらのように鮮やかな黄色で舞った。積もった落ち葉を両腕一杯にすくい上げて、放り投げた。風に乗ると面白く舞った。風がないと頭や肩に落ちた。それが面白いのか、何度も同じように放り投げた。銀杏の葉を頭に載せて笑う妻が可笑しい。妻の笑顔が黄色に輝いて胸に迫ってくる。無邪気な笑顔が涙で曇った。和男は、いつからか涙で顔を濡らしていた。拭いても、また溢れてくる。

妻は人目もはばからず大声で和男を呼んだ。

「あなたー、あなたも来てよ。ホラッ、きれいでしょー」首に掛けたストールも落ち葉と一緒に、はねて落ちた。

和男は涙を拭いて頷いた。そして、一緒になって落ち葉を放った。高くきれいに舞ってくれと、祈って放った。

子供連れの親子が通った。その子供達二人が駆け寄ってきて、和男達と同じようにして落ち葉を放った。声を上げて、はしゃいで遊んだ。

すると妻はストールを拾って、急に放るのを止めて動かなくなった。子供達がするのを瞬きもせずにジッと見つめている。見開いた目から大粒の涙が落ちてきても、ジッと動かないで見つめていた。しかし、一瞬、顔をゆがませると、突然和男の胸にぶつかるように飛び込んできた。そして、堰を切ったようにいつまでも泣きじゃくった。

遊ぶ子供達を見つめて妻は何を悲しく想ったのだろうか。

和男には、忘れることのない出来事になった。

妻は入退院を繰り返して、二年も待たずに亡くなってしまった。

妻が入院してから、和男の生活は一変した。夜間に食品工場の日雇いに出たり、やはり夜間の警備などを仕事に選んだ。

何よりも優先して妻の看病をするには、融通の利く日雇いしかなかったからだ。

それでも妻が一時退院すれば、やっかいなことも多くなって、時には仕事に出掛けることもできなくなる。次第に妻が徘徊するようになってからは和男が誰だかもわからないと言うのだ。とても仕事どころではなくなった。和男の介護疲れも手伝って妻を叱りつけることもあった。特に、下の世話をするようになって泣かすようなことも言った。

そんな時、和男を励ますのは、銀杏の落ち葉をすくって放る妻の笑顔だった。泣きじゃくったあの時を思い出すのだ。そうすると、また、妻を守る決心に奮い立って愛しく思う気持ち湧いてくる。

弱る妻を強く抱きしめては、二人で一緒によく泣いた。

○

妻が亡くなってから、時は又、5年と流れていった。

麻美は、妻が亡くなるまで築地の茶屋で仕事をしたが、その後は、銀座の名のある寿司屋で職人として勤めている。亮も、同じ年に独立をして蒲田にデザイン事務所を開いた。

亮には、もうすぐ一歳になる子供がいる。和男の初孫だ。しかし、亮は子供を認知しても結婚はしなかった。相手は由佳という一歳年上の女で、麻美と同じ築地の茶屋に勤めていたので和男は以前から知っていたし、麻美と同じ高校の二年後輩であることも聞いていた。性格も明るい割にはおとなしい方で、亮には似合いだと思っていた。

亮は事務所二階に一人住まいしている。二人に子供ができてからも変わらず住んでいた。由佳は由佳で子供を引き取ってマンションに住んでいるが、子供のできる以前から同じマンションだという。初めから同居したことがないので確かに別居とは言えない。でも和男は、二人一緒にマンションに住んでも特別仕事に支障あるわけでもないし、それが自然だろうと、不思議に思っていた。

亮達に子供が生まれてからは何度か和男を訪ねて来ている。二人は子煩悩なところも似て、実に仲が良いのだ。子供をあやして可愛がる様子は夫婦そのものだった。だからなぜ結婚しないのか。結婚しないまでも、なぜ別居しているのかと、亮には何度も聞いた。亮は、仲が悪いのを隠しているわけではなく、結婚も同居もお互いに興味はないし不自由もしない。むしろ、二人は拘束しないことで生活を楽しめると言うのだ。和男にはサツパリわからなかった。

それが何となくわかったのは、つい最近のことだ。和男が由佳と孫の二人住まいを訪ねた時だった。孫に会いたいことも正直あったが、孫はまだ一歳だからその生活は大変だろうと心配して訪ねたのだ。すると、そこに麻美がいた。偶然ではなかったのだ。

麻美は、二人の面倒は自分が見ているから一緒に住んでいると言った。実に、あっさり
と、そう言った。

和男は、恐る恐る、麻美に聞いた。

「亮は、どうなるの？」

「亮は、お父さんでしょ！時間さえあれば始終来て、あれこれと相変わらずごまごまや
つてるよ。なあー、由佳」

「ええ、今度、また一緒に寄らせてもらいますウー」

「あっ、そう・・・」

「亮は、今でも母さんを喜ばしたいんだよ。なあー、由佳」

「そうなんです。お母様にも孫を見せたかったと、いつも残念がっていますから・・・」
「仏前でもいいから、マー君を見せたいんじゃないの？」

「ええ、そう言ってますわ」

「あっ、そう・・・」とは、言ったものの。和男には良くわからない。『それで、麻美は？』
と言い掛けたが、止めた。

とにかく、さわらぬ神にたたり無し、知らぬが仏だ。

そう思って口を閉ざしていたら、マー君がハイハイして寄ってきた。

「なーんて、可愛いんだろ！」

「バア・バア、バアバ」

「マー君、バアバじゃないよ。ジイジだよー。マー君、ほーら、ジイジって、言ってみ
な？」

「どれッ、オー、重いなー。マー君、ジイジだよ」

「だめだよ、そんなんじゃない。頭、持たないとー」

「やな、おばちゃんだねー。うるさいけど、がまんチナッ」

「おとう、ちゃんと食べてんのか？」

「ほーら、うるちやいでちヨッ」

完